

中国文化学会 平成17年度シンポジウム：東アジア (日本・中国・台湾・韓国)の漢文(古典)教材の 比較

著者	青木 五郎, 渡辺 雅之, 木村 淳, 大橋 賢一, 辛 賢
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	64
ページ	79-83
発行年	2006-06-24
URL	http://doi.org/10.15068/00150603

○中国化学会 平成17年度シンポジウム

東アジア（日本・中国・台湾・韓国）の漢文（古典）
教材の比較―

「雑説（馬説）」、「送元二使安西」をめぐって

コーディネーター 青木 五郎

昨年八月、二松学舎大学で、「東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来―日本・中国・台湾・韓国」の漢文教育と漢文教科書をめぐって」と題する国際シンポジウムが開催された。漢字文化の伝統を共有する東アジアの四つの国家と地域の代表が一堂に会して、自国の漢字漢文（古典）教育の歴史と現状について報告し、いわゆる漢字文化圏の再構築の可能性について検討するこの試みは、まさに画期的なことであった。それは巨視的には、西洋主導の「近代化」に対する文明史的反省が取りざたされる中で、漢字文化に醸成された東洋的叡智の復権は可能なのかという問いを前提としつつ、現実的には、隣国の漢文（古典）教育の経験を「他山の石」（他人のすぐれた面を参考にして自己の欠点を修正し、見識を高める）として、危機的状況にあるわが国の漢文教育に対する打開策の一助とするという意味をも持つものであった。

報告・討論の詳しい内容は同シンポジウム実行委員会の報告書にゆずるとして、漢文教育を柱の一つとする我々の学会も、こうした試みを単発的なものに終わらせることなく、継続的に発展・深化させるための努力を惜しむべきではないと考え、今年度は次の企画でシンポジウムを行うこととした。

一、主旨 日本・中国・台湾・韓国 の四つの国家と地域で共通に採用されている同一作品についてそれぞれの国や地域でどのように教材化され教育実践されているかを調査し、報告をする。その調査・報告に基づく比較検討を通して、近隣諸国における漢文（古典）研究教育の現状についての知見を広めるとともに、わが国の漢文教育における教材研究や指導法を考えるための資とする。

二、取り扱う教材 イ、散文「雑説（馬説）」（韓愈）ロ、韻文「送元二使安西」（王維） 付「黄鶴楼送孟浩然之広陵」（李白）

三、パネリスト イ、日本 筑波大学附属高校 渡辺雅之氏 ロ、中国 二松学舎大学 木村淳氏 ハ、台湾 筑波大学附属中学校 大橋賢一氏 ニ、韓国 大阪大学 辛賢氏

（二松学舎大学）

今回は日本の教科書でもよく取り上げられる「雑説」、
「送元二使安西」について、日本・中国・韓国・台湾でど
のようにこの教材を扱っているのかを比較した。筆者は日
本の状況を調べることにした。

まず、「雑説」について

1 「国語総合」、「古典1」など、十数以上の教科書がこ
の「雑説」を取り上げている。つまり、この教材は日本
では定番教材だといえる。中国・台湾・韓国でもこの教
材は「馬説」という名で取り上げられており、これも定
番教材といえる。

2 「嗚呼、其真無馬邪、其真不知馬也。」の部分。日本の
教科書では、『唐宋八家文読本』『韓昌黎集』に基づいた
本文が圧倒的に多いが、『古文真宝』『文章規範』に基づ
いた「嗚呼、其真無馬耶、其真不識馬耶。」という本文
を取っているものも散見する。ところが、日本以外は
『唐宋八家文読本』系のものばかりである。つまり、こ
の一文の後半を、断定として読んでいるということにな
る。『古文真宝』系は、前半も後半も疑問として読んで
いる。

3 次にこの「雑説」の扱い方であるが、日本では官吏の

任用制度のあり方の主張ととらえさせようというのが、
ほとんどの指導書等でみられるが、日本以外、とくに中
国では政治思想という思想教材としての扱いをしている
ようである。

続いては、王維の「送元二使安西」について

1 日本の教科書の場合、中学校のものも含めるとほぼ全
社が取り上げている定番中の定番といった教材である。
また、台湾では教科書では取り上げていないが、中国で
も、韓国でも取り上げている教材で、それだけ感銘を与
えうる、別離の詩の絶唱といつてよいであろう。

2 この教材に関しては、四方国とも教え方に大きな差は
ない。ただし、中国でも、韓国でも、詩は暗誦というこ
とに重点が置かれているように思われる。日本でも暗誦
を無視しているわけではないが、詩教材は暗誦すべきも
のという暗黙のうちの了解は日本にはないようで、残念
である。
(筑波大学附属高等学校)

東アジアの漢文教材の比較—中国

本報告では、中国で最も普及している教科書である人
木村 淳

民教育出版社版『義務教育課程標準実驗教科書・語文』（一年級から九年級まで各上下冊、二〇〇一年六月〜二〇〇三年十二月）をもとに、「馬説」と「送元二使安西」の取り扱いについて整理を行なった。『課程標準』とは二〇〇一年に公布された政府の定めた指導要綱を言い、新しい『課程標準』のため「新課標」とも呼ばれる。今回扱う教科書に基づいた「新課標」や教師用指導書（同社『教師教学用书』、『課堂教學設計与案例』等）を参照し、語文科全体に関わる目標をふまえながら、中国の古典教育が現在目指す方向性的一端について紹介することに努めた。

「送元二使安西」は四年級、「馬説」は八年級で学ぶ。教材の構成自体には際だった特徴はない。注目すべきは作品の扱いや「練習問題」に現れた最近の傾向である。指導書の「送元二使安西」に関する箇所では、他の生徒の朗読の仕方や詩句の解釈について意見交換を行わせることを推奨している。つまり教師がすぐに解答を与えるのではなく、自分達の力で作品をより深く理解することを強調しているのである。「馬説」の練習問題では、内容に関する質問として、現代社会においてはいかなる人材が必要とされるか、人はいかに才能を発揮して今を生きていくべきかといった現実社会との関連性を考えさせる問題が設けられている。

そうした問いによって作品に対する理解を深める指導は従来より行われてきた。また、古典を通じて自国の文化を学ぶとともに、様々な文体に触れることで生徒が自らの表現力を高められるよう指導することも受け継がれている。ただし「新課標」に基づいた教科書には、教師がある一つの答えに導くのではなく、それぞれの生徒が自分なりの意見を述べるのが大切であるという理念が根底にあり、ここに従来の教科書とは異なる特徴がうかがえる。



シンポジウム風景

会場からは東アジアの漢文教育は文化教育と呼ぶべきものではないか、との意見が出された。確かにそれは共通点と言える。ただ中国の場合、漢文教材は自国の古典であるため、言葉の運用面の指導にも重きが置かれてきた。前

述のように、最近の傾向としては発表・討論の比重を増やすよう提起されている。そうした所に他の東アジアの漢文教材との違いを見ることができるといえる。
(二松学舎大学)

東アジアの漢文教材の比較—台湾

大橋賢一

台湾について、韓愈「雑説」と李白「黄鶴樓送孟浩然之広陵」の二つの教材をとりあげた。なお、台湾の教材にだけ李白詩をとりあげたのは、王維「送元二使安西」をとりあげている教科書が見つからなかったからである。

二つの教材の解釈に関しては、台日の間に大きな違いはない。音注や解釈の付け方については、台湾のほうが細かい音注がなされているが、日本語のようにルビがない以上、それは当然のことであろう。

ただ、解説文や課題については、台湾独自の特色が認められる。例えば、「雑説」にも李白詩にも、台湾には日本の教科書にはない解説文が付されている。「雑説」の解説文には、文章の構成や、馬や伯樂が何に喩えられているか、また文章にはどのような特色があるのか、ということについて比較的細かく書かれている。また課題については「あなたは今これまでに動物を飼ったことはありますか。飼

っている過程で、どのようなことを学び得ましたか。クラスマートフォンと話し合ってみよう」というものがあり、これは「雑説」から離れて自分の意見を述べよ、という趣旨のもので台湾独自の課題である。また、台湾には「応用練習」という項目があり、馬に関する成語と、歴史上の人物に関わる成語がどのように使われているのかを確かめる問題が用意されている。この問題からは「雑説」をきっかけとして、生徒の語彙力を高め、また表現力を養おうというねらいが感じられ、こうした質問は日本の教科書に見られないものであり、台湾から見習うべき工夫の一つと思われる。

李白詩の鑑賞文には「古代は交通の便が悪く、一度別れてしまうと再会するのは困難であった。友人と集まることも簡単ではなく、送別はまた格別の感傷を表すものであった。だから、別れ難い心情を描写することは、送別詩の主な特色となっている」といった当時の時代背景に関する説明があり、生徒の知識を補うような配慮がされている。

以上のように台湾の教材には、古典の学習に止まらず、現代語との関わりが意識された課題や、細かい解説文が掲載されており、こうした台湾の教科書の特色は、今後日本の教科書を作る際の参考に資するものと言えよう。

(筑波大学附属中学校)

韓国の漢文教材の特徴について、まず、学習単元の構成面から述べておきたい。韓国の教材は各単元の主題に関する解説（「基本編」）のほかに、「応用編」の学習コーナーが設けられている。「応用編」では面白い説話や教訓的な格言などをハンゲル漢字交じりの文で掲載し、学習者が一般教養としての漢字を多く習得するように工夫されているなど、韓国の漢文教材は、この「応用編」の占める割合が大きい。主題に関わる解説を主とする日本の漢文教材に比べて学習内容が多様で充実しているとはいえるが、その反面、雑然として体系を欠いている感もある。

一方、その内容を検討すると、いくつかの問題点が指摘できる。まず、韓国「雑説」では、本文を正しく理解するためのポイントとなる用語や文節について説明が疎かになっている。たとえば、なかには「雑説」の主旨に関わる「伯樂」について、何をする人で、馬とどのような関わりがあるのかについて全く説明されていないものもあり、これですたして「雑説」の主旨について学習者の理解が得られるかどうか。さらに、「故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、

駢死於槽檻之間、不以千里稱也」においては、「奴隸の人」「並んで死ぬ」（何と並ぶ？）「馬小屋の間」（馬小屋と馬小屋の間？）と解しており、これもたんに文字をなぞっただけの意味不明な訳文になっている。また「才美不外見」のくだりでは、「才美」を「才能と美しさ」と誤読しているなど、その内容は杜撰というしかない。

一方、李白と王維の漢詩では、比較的理解しやすい充実した解説を行っている。全体的には、詩人の情緒や漢詩の形式、または作品の表現技法などについて、噛み砕いた分かりやすい説明がなされており、詩人の心情や著述の意図について学習者の想像を働かせる工夫がなされている。

韓国では、長年ハンゲル専用政策が推し進められ、日常的に漢字を目にする機会が少なく、国語（韓国語）の八割が漢字語であるのに、漢字に対する馴染みは薄い。したがって、漢文教育に対する学校の役割は非常に重要な位置にある。韓国の漢文教材は、学習者の関心を高めるための様々な工夫がなされている一方、「雑説」にみられるような問題点も抱えており、こうした点を解決していかなければ、漢字や漢字文化への関心はますます減ることになる。

（大阪大学）